ジャック・ダルクローズとモンテーニュの子ども教育観に関する比較研究

古　谷　和　子

Children's Education Between Jaques-Dalcroze's and Michel Montaigne'

FURUTANI Kazuko

キーワード：J= ダルクローズ、モンテーニュ
リトミック、スイス

はじめに

20 世紀初頭のスイスを代表する音楽教育家エミール・ジャック＝ダルクローズ（Jaques-Dalcroze, Émile；1865-1950　以下、J= ダルクローズと記す）の教育法は、聴覚を育てるソルフェージュを中心とした音楽教育から、リズム身体運動のリトミック、さらにプラスティックアニメへと少しずつ深化し、音楽療法の分野へも広がっていったが、その過程において彼は様々な分野から影響を受けていることが、彼の著書より窺える。彼の教育は、美しい音楽を奏でるための教養としての音楽教育から、音楽が直接人格に働きかけ、子どもの集中力などを引出し、また人間の様々な能力を伸ばす教育へと変遷していく。その過程において彼は 1905 年にスイスの音楽教育会議において「学校音楽教育改革」を発表した。当時スイスの学校音楽の位置づけは非常に低く、音楽教育の必要性を訴えるというものであった。しかしその後発表した論文「学校、音楽、喜び」（*L'ÉCOLE, LA MUSIQUE ET LA JOIE*　1915）においては、音楽は、様々な教育者や哲学者達によって高い位置づけがあてがわれていると記述している。J= ダルクローズは、音楽教育や子どもの教育の構築過程において彼自身の著書に挙げられているそれら哲学者達の教育思想をどのよう捉えていたのだろうか。それらの教育思想を探ることは、J= ダルクローズ研究において意義あるものではないかと考える。

本稿でその中の一人、ミシェル・エケム・ド・モンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne；1533-1592　以下、モンテーニュと記す）を取り上げたのは、J= ダルクローズの著書において、筆者が調査した限りでは、他の哲学者と比較して最も多くの記述があり、またモンテーニュの著書『エセー』の中に「子どもの教育について」という興味深い章があったためである。

1．研究の目的

本研究では、当時のスイス音楽教育を概観しながら、モンテーニュの教育思想を検討することによって、彼は音楽や子どもの教育をどのように捉えていたのかを明らかにする。また J= ダルクローズは子どもの教育やリトミック、人間教育の構築過程において、モンテーニュとどのような共通する考えを示しているのかを比較検討し、リトミックが生まれた背景を探ることを目的とする。

2．研究の対象と方法

研究にあたっては、J= ダルクローズ著書では『リズムと音楽と教育』[1]　*'LE RYTHME LA MUSIQUE ET L'ÉDUCATION'*（1965）、『リトミック・芸術と音楽』[2]、『音楽と人間』[3]　*'LA*

MUSIQUE ET NOUS ; Notes sur notre double vie (Perret- Gentil , Genéve)'（1945）を主な研究対象とした。

上記の著書はJ= ダルクローズの論文集であり、彼の教育理念、教育方法、哲学等を知る手掛かりになると判断した。また *'LE RYTHME LA MUSIQUE ET L'ÉDUCATION '* には、複数の訳本があるが、本稿で参考にしたものは、特定非営利活動法人リトミック研究センターにおいて推薦された書籍の一冊であり、大学の専門研究や多くのリトミック研究者においても使用されているものであり、信頼性が高いと判断したためである。

また、『エミール・ジャック・ダルクローズ』*'E'MILE JAQUES − DALCROZE '*（1965）は、彼について様々な角度から数名の学者たちによって研究された書であり、貴重な資料である。

またスイス教育史については、世界教育史大系『イタリア・スイス教育史』、「スイスにおける国民学校の発展過程」（遠藤盛男 1983）他を参考とした。そしてモンテーニュについては、「子供の教育について」という章のある、主著『エセー』*'Les Essais'* 全３巻（岩波文庫では全６巻）を研究の対象とした。

以上の文献から、当時のスイス音楽教育を概観しながら、J= ダルクローズの著書からモンテーニュの記述を抽出し、J= ダルクローズの音楽教育や、子供の教育に関する考察を行っていくこととする。

３．スイス初等教育史

J= ダルクローズの音楽教育を検討するにあたり、スイスについて、また同時代のスイスの教育史を概観していく。

スイスは、僅か面積 4.1 万平方キロメートル（九州と同じくらい）の小さな国の中に、フランス系、ドイツ系、イタリー系の３つの民族が集まり、言語はドイツ語、フランス語、イタリー語に加えてロマンシュ語を用い、主にカトリックとプロテスタントの宗派を持つ連邦共和制の国であり、現在 26 の州（カントン）により構成されている。[4]

そしてルソーやペスタロッチを生んだ国であり、J= ダルクローズが生まれ活躍した国である。

１）18 世紀末の民衆学校

ツヴィングリとカルヴァン等の宗教改革による「プロテスタント的な勤勉の精神とスイス的な質実さ」[5] は、絹織物や時計製造、宝石細工などの産業をも発展させた。このため民衆間での教育需要は増え、民衆学校は公営とされるようになっていたが、公営校舎を持たず、教師の自宅を教室として使用し、教育内容は旧態依然としたものであり、それぞれの宗派ごとに教義問答書や讃美歌の読み、暗唱、歌わせることが中心であった。[6]

２）19 世紀

1830 年頃は、全日学校（６～ 12 歳）と復習学校（堅信礼の年齢まで）とに分類されていたが、全日学校では、主に読み、書き、九九、初歩的暗算、道徳・宗教的金言と讃美歌の暗記が指導され、復習学校では特に教会的、宗教的目標に則した科目（賛美歌は必修）が行われ、内容から見ても 18 世紀の教会的国民学校の伝統を継承していたに過ぎず、教材は教会の意向に従い、牧師の許可なしでは授業時間も変えられず、明らかに教会の絶対的支配下にあった。[7]

しかしこの様な状況において国民自身から学校制度の改善を求める声が上がり、あらゆる児童の教育、人間教育の意味における知的・性格的素質の育成、個人ならびに国家的共同体を考慮した教育を目標としたチューリッヒ独自の教育改革が行われた（1832）。その第一条では「あらゆる国民階層の子供を一致した原則に基づいて教育しなければならない」とし、公教育制度が定着しつつあった。しかし当時の社会情勢から「精神的に勤勉な」「市民として有能な」「道徳的・宗教的な」人間への教育を目指す理念を維持することは難しく、国民学校は知的傾向が色濃く、学習学校的指導となる傾向があった。[8]

3）20 世紀初頭

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパやアメリカを中心に新教育運動が世界に広がった。これは教師や教科書中心、暗記中心の教育から児童中心の教育改革への試みであり、子どもの自主性、活動性、想像性を重んじる教育運動であった。

フランスのドモラン（J.E.Demolins；1852-1907）は『新教育』を、アメリカの J= デューイ（John-Dewey；1859-1952）は『学校と社会』1899 を、スウェーデンのエレン・ケイ（Ellen Karolina Sofia-Key；1849-1926）は『児童の世紀』1900 を著し、イギリスの C= レディ（Cecil- Reddie；1858-1932）やドイツの H= リーツ（Hermann Lietz；1868-1919）は田園教室を設立するなど次々と新しい理論が展開され、実践がなされていった。

このような状況下、スイスにおいてもルソーやペスタロッチの教育思想と実践を経て、新教育運動が起こっていた。

4.「学校音楽教育改革論」1905

スイスでは、フェリエール（Adolphe Ferriere；1879-1960）らが新教育運動を展開しつつあったが、当時音楽だけが「お目こぼしの科目」[9]として扱われ、低い位置づけがあてがわれていた。

そのような状況下、1905 年 7 月、ソルールにおいてスイスの音楽家達が集まり、第 6 回音楽祭が開催された。その際に音楽教育会議が開かれ J= ダルクローズは「学校音楽教育改革」について講演し、その方法を述べた後、実技を行った。

1）音楽教育の現状

前項で見てきたように 19 世紀以前は、典礼に堂々と参列できるようになるために音楽を学んでおり、実用的な目的のための学習であったが、20 世紀に入り宗教的信仰は、薄れてきていた。「教会でも、世俗の子どものお祭りでも、レクリエーションでも、体育のリズム補助としてでも、歌をうたう機会などまったくない。」[10] と J= ダルクローズは述べている。また 1874 年に成立したスイス連邦憲法第 27 条によって、「カントン（州）は、国家的指導の下にのみあるべき充全な初等教育を行うようにする。」[11] とし、各カントンは常に視学官を通じて初等教育を指導・監督してきたが、音楽においては「年に一度視察に来る視学官の耳を喜ばすためだけのもの」[12] であり、人々は音楽に無関心であり、その価値を見いだせないような授業内容であると訴えている。

2）原因と背景

J= ダルクローズは、以上のような現状には次のような原因が考えられるとしている。

音楽教育が成果をあげていないのは、オウム返しの歌唱指導を行ったり、指導方法が「ほとんどすべて感覚にかかわる実験ではなく、理論上の分析に基づいて」[13] いる為である。

また音楽の専門家が教えておらず、「耳も声もダメな教師たちを音楽教師の職位につけたままにしている」[14] からであり、「過去の方法に固執する道を選んできた」[15]、学校当局の型にはまった教え方をしている事が原因である。

さらに「学校当局者たちが、音楽教育については何の知識ももたず、またもとうとも望まない…」こと [16]。視学官たちに学習の統制を任せっきりにしていること、公立教育行政当局が問題にまったく興味を抱いておらず、またその重要性にも気付いていないこと、教育審議会に音楽界から誰も入っていないことが原因である [17] と J= ダルクローズは嘆いている。そして音楽の聴き分けができなかった者は、その必要性を感じはしない、音楽の真髄は学校当局者たちには解読不能の言語で書かれているにも拘らず他人に解読を依頼しない、しかし教師の任命、教育方法の選択決定権は彼らにある [18]、「ここになぜ音楽がわが国では他の教科のように進歩しないのかの理由がある。」[19] と音楽教育が軽視されている原因を述べている。

3）位置付けの低さ

20 世紀初頭のスイスにおいて、音楽は芸術の中心部のそとに置かれ、教育者だけでなく、画家、彫刻家、文学者たちからも低い評価しか与えられず、ジャーナリスト達には「音楽を報道の量

においてもほとんど無視してよいものと…」[20] 見なされていた。

「公立教育機関を担当する役所の大部分に漲る先進性と知性溢れる精神のおかげで、その学校教育制度が最も広く賞賛されている国である。それなのにどうして音楽だけが、…旧態依然としたまま放置されているのだろうか。」[21] と音楽だけが低い位置づけをあてがわれていることに大きな疑問を投げかけている。

5．音楽授業の配当時間

カントン・チューリッヒは、教会の絶対的支配下におかれた状況から学校制度の改善、教師の質の向上の要求等を盛り込み、人間教育の意味における知的・性格的素質の育成などを目標においた1831年のカントン憲法や1832年に教育法を成立するなど、他のカントンの模倣の対象になっており、スイス全体の教育指標にもなっていたカントンである。

以下はJ= ダルクローズが「学校音楽教育改革」を発表したと同年1905年のカントン・チューリッヒの第５学年の１週間の授業時間を示す。

ドイツ語　　：５時間、
算数・幾何　　：５時間、
実科　　：５時間（女子：４時間）、
（新兵徴募試験で重視されている郷土学など）
体育　　：３時間、
図画　　：３時間（女子：２時間）、
聖書物語および道徳：２時間、
音楽　　：２時間、
書（法）　　：１時間、
手工労働　　：６時間（女子のみ）[22]

1874年に成立したスイス連邦憲法第20条によってカントン独自に行われていた新兵徴募試験の権限は全て連邦に移り、試験科目は、読み、作文、算数、郷土学（地理、歴史、憲法学）、体育であり、成績は兵役義務者の勤務手帳に記入され、連邦統計局に結果が集計、分析され、カントンごとに結果が公表されていた。この為、各カントン間の競争心を煽る結果となっていった。カントン・ベルンの教育局長のリチャードは1907年に「我々の学校は生活のための学校ではなく、新兵徴募試験のための学校である」[23] と連邦軍事当局宛てに訴えている。特に郷土学においては、年代、統計、歴史事実のみの解答を求められる試験内容であったため、知育偏重に偏っていった。ましてや子どもたちの「感性や心情に音楽への真の愛好を孵化」[24] させることなど、この時代においては全く必要とされない音楽であった。

6．音楽の位置付け

では音楽は「二次的な枝葉、学習計画の中ではいちばんのどん尻、不体裁だがお目こぼしで認めてやる傍流の科目」[25] なのだろうか。過去の哲学者及び教育者たちは音楽をどのように捉えていたのだろうか。J= ダルクローズが1915年にベルギー王のアルベール・マルシュ（Albert Leopold Clement Marie Meinrad 1875-1934、在位1909）に献呈した論文「学校、音楽、喜び」の中で彼は以下のように述べている。

「古今の偉大な精神の持ち主たちは、音楽に対し、教育における格別の重要性をあてがってきた。音楽家が教育全般の領域にまで浸食しているとの非難を浴びるなら、プラトンや大多数のギリシャの先賢たちの権威に訴えるだけで充分であろう。同様にモンテーニュ、ヘルベティウス、ロック、ライプニッツ、ルソー、ゲーテ、シラーなどにも言及して、すべて健全な教育法では、すなわち、身体の精神への、精神の身体への、感覚の思考への、あるいはその逆の、密接な相互への働きかけというものに基礎を置いているすべての教育法にあっては、音楽や音楽に依拠している芸術に高い位置づけがあてがわれていることを認めることができよう」[26]。このように過去の偉大なる賢人たちは音楽を価値あるものとして捉えていた。

本稿ではJ= ダルクローズとモンテーニュの教育思想を比較検討することによって、リトミックや子どもの音楽教育、人間教育が構築された背景

を探る。

7．J= ダルクローズとモンテーニュの教育思想

1）モンテーニュと『エセー』について

a．ミシェル・エケム・ド・モンテーニュ

彼は、1533 年 2 月 28 日ボルドー近郊のモンテーニュ城で、商業を営む富裕な地方貴族の家庭に生まれ、1592 年 9 月 13 日に同地で没した、16 世紀ルネッサンス期を代表するフランスの哲学者、モラリスト、懐疑思想家である。「私は何を知るか」Que sais - je? と自己省察に向かうべきことを説いた[27]。教育熱心な父（後のボルドー市長）は、ラテン語の家庭教師 3 名を雇い、幼少の頃から 6 歳までラテン語で育て、またムチや体罰による過酷な強制ではなく、子ども自身の欲求から遊びを通してのエラスムス式教育法で育てた。その後、モンテーニュは古典、哲学、法律等を学び、ボルドー高等法院の参事となるが（1554）、1570 年に職を辞し、パリでラテン語の詩及び翻訳の著作集を刊行する。1571 年 38 歳の時に故郷ボルドーのモンテーニュ城に戻り、エセーの執筆を進めた。[28]

b．『エセー』

モンテーニュが、『エセー』（Le Essais　1580 ～ 88 年刊行）の執筆を始めたのは 1572 年からである。“エセー”とは、動詞（essayer）「試す」の名詞化「試みること」という語義である。1580 年に「読者に」というタイトルを含む 57 編からなる第 1 巻と、37 編で構成される第 2 巻が刊行され（a）、さらに 1588 年に第 3 巻の 13 編が刊行された。同年、第 1 巻と第 2 巻の改作に近い大増訂が施され（1588 年版）（b）、その後 1588 年版の余白に死ぬ間際まで自筆で次々と書き加えをした、それが今日の決定版「ボルドー市版原本」（c）である。

第 1 巻の冒頭「読者に」においては、「読者よ、これは正直一途の書物である。はじめに断わっておくが、これを書いた私の目的はわが家だけの、私的なものでしかない。あなたの用に役立てることも、私の栄誉を輝かすこともいっさい考えなかった。」[29] と綴られ、さらに本稿で主に抽出している「子供の教育について」（1 巻 26 章：1578 又は 1580 年執筆）は、「一般人民のために書かれたのではない。…ギュルソン伯と云はれる大貴族の御曹司のために、特に選んだ一師傅をして行はしむべき教育案」[30] と記述され、本題の冒頭では「人間の学問のうちでもっとも困難で重大な問題は子供の養育と教育にある」[31] と記述されている。

しかしこの章に限らず全体においても、子どもの教育、さらに一般の養育問題についても多くが語られている書といえる。彼が重視したことは、哲学、徳であり、方法としてはあらゆる場所、事物を教材とし、体罰のない、自主性を尊重した教育であった。また教師の選択も重要であるとした。

当時フランス語で書かれたこの古典教養書をフランス語圏ジュネーヴ出身の J= ダルクローズは精読していたであろう。

では J= ダルクローズ著『リズムと音楽と教育』、『リトミック・芸術と音楽』、『音楽と人間』からモンテーニュに関する記述を抽出し、考察していく。

2）J= ダルクローズの著書におけるモンテーニュの言説

a．興味・関心

J= ダルクローズは、「学校音楽教育改革論」の中で教師の役割は、子どもたちの意志を導き、人格を誕生させること、子どもたちの精神に光を点し、照り返しの輝きが増すようにすることと述べた後、以下のように続けている。「モンテーニュのいうように『子どもの想像力の中に、彼に知らせたいと望む事柄へのまっとうな好奇心があると見なし、その知識欲を刺激しながら子どもを養育するのが適切である』」[32]。この言説は、おそらく以下のモンテーニュ著『エセー』の一節を引用したものと思われる。

「（a）…まず勉強の意欲と興味をそそることにまさるものはありません。さもないと書物をむやみに背負わされた驢馬が出来上がるだけで

す。」[33]

子どもは、元々多くのものに興味と関心を持っている。その中でも“動き、リズム”は、「最も強烈に感覚に訴える」[34]ものである。全部覚えることを要求するのではなく、子どもが面白いと興味・関心を持てるような指導法が望ましい。

理解することと記憶することは違う。モンテーニュは述べている。「(c) 暗記することは知ることではありません。それは記憶に預かったものをしまっておくだけです。正しく知っていることならば、お手本を見なくとも、書物に目を向けなくとも、自由自在に使いこなすことができます」[35]

J= ダルクローズが言うように「子どもが一番好むのは、楽しみの種になる事物を、想像の中で自ら紡ぎだし、飾り立てることなのである。同様に彼は、少しでも自分を出せる学習に興味を抱くのである。」[36]

さらに「学校音楽教育改革論」の中で「創作意欲は全ての子どもに共通のもので、教師たるものは、この嗜好とこの気質を利用するどんな機会も逃してはならないのである。」[37]と加えている。

当時の音楽の授業は、典礼に堂々と参列するためという16-17世紀の実用的目的は消え失せ、しかしまた道徳的目的のためでもなく、年に一度視察に来る視学官を喜ばすためにオウム返しで歌を覚えさせていると J= ダルクローズは訴えている。しかしその様にただ覚えさせる指導は、モンテーニュのいうように「書物をむやみに背負わされた驢馬が出来上がるだけ」[38]なのである

以上のように J= ダルクローズは「学校音楽教育改革論」の中でモンテーニュの『エセー』の中の一節に自分の教育法の根拠を見出していたのではないだろうか。このモンテーニュの言論は、『エセー』刊行後もジョン・ロック（John Locke;1632-1704）やルソー（Jean-Lacques Rousseau　1712-1778）をはじめ多くの教育者、哲学者が言及している。J= ダルクローズもあえて音楽教育会議で今一度訴えたい内容であったと考えられる。

b．調について

J= ダルクローズが創案した教育、リトミック法は、音楽を聴覚だけに止めず、身体で体現し、身体と精神の統合した音楽表現、さらには豊かな人間教育を目指した音楽教育法である。

第一にユーリズミックス（以下、リトミックと記す）と呼ばれるリズム運動、第二にソルフェージュ、そして第三に即興演奏の３つの要素で成り立っている。

第一のリトミックは、身体運動を通して音楽の様々な側面や表現的な性質を全身で感じとり、第二のソルフェージュは、音高をシラブルとともに歌うことによってより鋭敏な聴取力を身に付け、そして第三の即興演奏は、身体運動、ピアノ、声またはその他の楽器を用いて音楽的なアイデアを即座に表現する[39]という目的を持つ。J= ダルクローズは「音楽を味わせ、好きにさせるには、子どものうちに聴く力を育成するだけでは充分ではない。音楽において、最も強烈に感覚に訴え、生命に最も密接に結びつく要素というのはリズムであり、動きだからである」[40]という考えの基、子どもの音楽教育をまずはリトミックから導入した。彼は、リズムは、時間―空間―エネルギー等を背景に存在するとし、知性で把握し、筋肉組織を用いて表現できるだけでなく、それを分析する頭脳と身体に迅速な情報伝達の確立の必要性を説いた。そして呼吸法、筋肉感覚、意志力・抑制力の開発、集中力の強化、内的聴取の創出、即時身体表現、身体を圧力のかかった状態に慣れさせることなどを目的とした。

さて１年間のリズム練習後、リトミックと平行して第二のソルフェージュ学習に入る。この学習は、「音の高さの段階と相互関係（調性）の感覚とそれぞれの音色を識別する能力」[41]を目覚めさせることを目的としている。視唱と聴音練習を主としたこの指導は、音階、旋法、音程、旋律、和声、転調、対位法、歌唱による即興などの理論と実習が学習内容である。

J= ダルクローズのソルフェージュ練習は、まず１線譜で２度上下の音を様々な開始音からシラ

ブルで歌い、２線譜、３線譜と増やしていく。さらに子どもたちにハ長調の音階で半音と全音を理解させる。この半音と全音は様々な開始音から歌ったり、手で音高を示しながら練習し、知的に、また耳や咽頭を使って感覚的にも定着させていく。彼の著書の“相対音感”についての一節で、子どもは全音と半音の違いをけっして誤らずに把握できる能力を持って生まれている[42]。それゆえ早期にピアノなどの楽器の学習以前にその教育を開始するなら、「正常な耳をもつすべての人に相対音感を目覚めさせることができる」[43]と述べている。

さらにハ長調の音階の上下行を様々なリズム（例えば４小節のリズム譜などから）を使用し歌うことによって開始音のハ音の絶対音感も付いていく。

そして彼のソルフェージュの特徴の一つに、声域が狭い子どもたちのためにすべての調の音階を従来のように主音から歌わず、ハ音から高いハ音までの音域で歌う方法がある。例えば変ホ長調であれば、ド - レ - ミ♭ - ファ - ソ - ラ♭ - シ♭ - ド、ホ長調であればド♯ - レ♯ - ミ - ファ♯ - ソ♯ - ラ - シ - ド♯と歌う。同様に全調で、様々なリズム譜で学習する。

次に音階の各音にローマ数字を付け（ドはⅠ、レはⅡ…シはⅦ）、例えば４小節のリズム譜にローマ数字ⅢⅡⅠⅡ　ⅢⅣⅤなどとふり、リズムに合わせてハ長調であればミレドレミファソと歌う。変ホ長調であれば、ソファミ♭ファソラ♭シ♭と歌う。このような学習からより高度な段階では同じ課題を全調で行うという指導法である。

このように「すべての調のメロディーとその随伴旋律、あらゆる性質のハーモニーとその組み合わせを聴いて、頭の中で思い浮かべ、楽譜で読んですぐに即興で声に出して歌ったり、記憶したり、作曲したりすることを学ばせる」[44]ソルフェージュ指導において、J= ダルクローズは次のように述べている。「肝心なのは、調の学習がこの上なく懇切丁寧に、細心の注意を払ってなされることである。…調の相互関係の認識は、先のモンテーニュのことばをかりれば、『精神に元来組み込まれたものではなく、あとからくっつけられたものなのである。なぜなら、心の中を流れすぎるのではなく、それを染めることが必要だからで、もし心が知識によって変化せず、その不完全な状態の改善を行っていないのなら、間違いなく、そのまま放ったらかしておく方がましである』」[45]と記している。つまり前述のように調の理解は知識としても難しく、また感覚的にも簡単に短期間で定着することはできないからである。

それゆえ時間をかけて指導しなければならないと述べている。さらに中途半端に教え、理解も中途半端な場合は、なおさら混乱を招くので指導を控えた方が良いとも述べている。

さてこの言説は、おそらくモンテーニュの『エセー』の中の以下の一節を引用したものと思われる。「彼は彼らのものの考え方を自分の中に滲み込ませねばなりません。彼らの教訓を学ぶだけではいけないのです。…自身のものとして身につけるようにしなければなりません。…他人からの借り物を、形を変え、混ぜ合わせてすっかり彼自身の作品を、すなわち、彼自身の判断を作り上げるべきです。」[46]

これは、子どもの教育についての中の一節である。クセノフォンやプラトンの思想を自分の判断によっていだくなら、それはもはや著者のものではなく、自分のものである。教訓を学ぶだけでなく、それは誰の教訓かわすれてしまう位、考え方を自分の中に滲み込ませ、自身のものとして身につけるようにしなければならないとモンテーニュは述べている。

J= ダルクローズの教育法において“音階”の習得は非常に重要であり、その後音程、和音、解決、転調、などメロディーとハーモニーに関することは全て調の学習に含まれている。それ故、その理解をモンテーニュの言葉を音楽のこととして解釈し直したのではないだろうか。

J= ダルクローズの教育観の形成には、モンテーニュから何らかの影響があったと見るのが、順当な考え方であろう。

c．早期教育の方法

人間の五感の中で最も早く発達する感覚は聴覚である。それゆえ J= ダルクローズは、音楽教育改革論の中でも「赤ん坊のときから、子どもが良い音楽だけを聴くように注意を払いなさいという忠告はいくらしてもしすぎではない」[47] と述べている。また「モンテーニュは書いている『見たところ、私たちの最大の悪徳は、きわめて早い幼児期にその萌芽をもっているし、私たちの主たる支配力は乳母の手に握られている』」[48] と加えている。これは『エセー』の、習慣がいかにわれわれの感覚を鈍らすかと述べた一節に続く以下の言説の引用と思われる。「…もっとも不思議なのは、長い合間と断絶をおいても、習慣がわれわれの感覚の上に印象を結びあわせて植えつける力をもっていることである。…われわれのもっとも大きな悪徳はもっとも若年の頃につくものであるから、もっとも大事な躾は乳母の手中にあると私は思う。」[49]

J= ダルクローズは、耳（聴覚）と喉頭（筋肉感覚）とは極めて密接に結びついており、…相互に影響しあっていることは間違いなく、「子どもの耳の発達を促す目的で、その声も併せて訓練するのは正しいのである」[50] とし、養育者の声の重要性を述べている。それゆえ乳母の話す訛りのアクセントをすぐに身につけてしまうと忠告している。

ルソーも述べているように子どもの教育は生まれた瞬間から始まる。あるいは胎教を考慮すれば誕生以前からである。人間の感覚で最も早く発達する感覚は聴覚である故、最も身近な養育者は、細心の注意を払って子どもの聴覚と言葉の教育をしなければならないであろう。

また『音楽と人間』にも「子どもに身体感覚とそれを言葉に表してみることとの緊密な関係について分からせようとすれば、モンテーニュが見事に言っているように『教育は乳母の腕の中で始め』なければならない」[51] と同じように引用している。

ここでは、耳（聴覚）と喉頭（筋肉感覚）だけでなく「体全体まるごとの感覚を身につけさせることができる」[52] と述べている。声を伴いながら手足を、テンポを変えて動かしたり、つま先歩きやかかと歩き、幅を変えたり、指示に躊躇することなく止まったり動いたりなど、子どもにとって楽しいこれらの活動を行いながら、身体感覚と発声の表現感覚の緊密な関係を教師は解り易いイメージで指導しなければならないとしている。

さらにピアノレッスン開始のための準備期間についても J= ダルクローズは、「揺りかごにいる時から子どもに音楽の準備をさせて、それからもっと後でピアノに取り組ませることはできるのである。モンテーニュが『ほんとうの音楽教育は、乳母の胸の中で始まる。』と書いているのは、道理に適っている。」[53] と、ここでも引用している。しかしここでは敢えて「音楽」を加えている。母親は赤ちゃんを歌いながら揺らし、色々な音を階名唱したり、手足を屈伸、屈曲させ、子どもに好きな動物の鳴き声や動作を真似させたりなど、常に遊び感覚によるこれらの教育を行うことは「聴覚と視覚と触覚を結びつける。」[54] と述べている。

このように子どもの教育は早期の教育が極めて重要であり、養育者は細心の注意を払って行うべきである。モンテーニュの原文にはどこにも「音楽」の記述がないが、J= ダルクローズは、この早期の教育方法にあえて音楽をあてがい、その重要性の根拠をモンテーニュの教育論に求めたのではないだろうか。

d．リトミックに関して

モンテーニュは、音楽については、「声楽にも（私の声は音楽には全然向かない）、器楽にも、何一つ習得することができなかった。」[55] と述べているが、『エセー』の中では、1580 年の刊行後も直接的、または間接的に音楽やその他の技芸に関することを加筆している。

「(a) 私は…すぐれた舞踊家たちが、われわれに坐っている場所を動かずに、ただ彼らが踊るのを見ているだけで、とんぼ返りできるように教えてくれるとありがたいと思うのですが。ちょうどわれわれの先生方が我々の判断力を揺すぶらず

に教育しようとするように。(c) また、馬や、槍や、琴や、歌を、練習なしで教えてくれる人があるとありがたいと思うのですが。ちょうど我々の先生方が練習なしでうまく判断し、うまく話すことを教えようとするように。」[56]

音楽教育は、声楽、器楽、作曲など全てにおいて具体的には、感性、リズム感、ソルフェージュ力、演奏技術など様々な能力を伸ばし、最終的には総合的な人間教育を目標とする。その能力のほとんどは時間をかけてより正しい方法での反復練習をすることにより向上することができる。しかし一方的な技術習得にも偏りすぎているのではないかということをモンテーニュは1580年頃に既に取り上げている。そして子どもがそれほど練習しないでも話し方を自然に覚えていくようにダンスや琴や歌の教え方がないだろうかと問題提起をしている。

一方J=ダルクローズは「話すことを教えるのとまったく同様に、リズム感を持たない子どもに、身体を眼や筋肉感覚がコントロールできる規則的な拍子をもった運動に慣れさせることによって、音楽的リズム感覚をもたせることは可能である。」[57]と述べている。固定されたものの繰り返し練習が中心であった音楽教育は、教師がピアノを弾き、生徒はそれを聴き、聴覚や視覚と筋肉感覚を連動させ、自分のイメージしたものを楽しく仲間と共に身体表現するという全く新しいスタイルの音楽メソード“リトミック”を彼が確立したことにより、話すことを教えるのと同様に、練習なしでリズムを自然に覚え、ダンスや琴や歌の向上に繋げていくことができるだろう。モンテーニュの「練習なしで…」という言説は大変興味深いことであり、以上のようにリトミックと関係が深いのではないかと推測される。

モンテーニュは、前述の通り、音楽を何一つ習得することはできなかったとあるが、教育法如何では習得できるのではないかと述べている。音楽の重要性や本質を理解していたが故に、「練習なしで教えてくれる人があるとありがたいと思う」とまで述べているのではないだろうか。

J=ダルクローズが「歌うこと」を中心としたソルフェージュから「聴くこと」聴力を発達させるリトミックの方法を形成し始めたのは1901年[58]頃である。1902年にはローザンヌの音楽学校でリトミックの思想を講演し、1903年には『ヴォー州フェスティヴァル』において「いくつかのクラスでリトミックの完全な方法の諸原則を実地に応用…」[59]している。まさにリトミックが形成、発展していく過程において、モンテーニュの教育思想にもその根拠を求めていたとも考えられる。

8．考察

当時のスイス音楽教育の位置付けは、非常に低いものであり、音楽の配当時間は、週に１～２時間という、ほとんど必要とされない科目であった。その理由は、社会的にも教育的にも歌う機会が全くなく、また指導方法は感覚によるものではなく、教師の選定と授業内容、教育行政当局にも問題があったからである。

しかしJ=ダルクローズの著書に記述のあるモンテーニュの教育思想を検討した結果、彼は、J=ダルクローズの音楽教育観といくつかの共通する考えを示していたことがわかった。

モンテーニュは、子どもの教育において最も重要なのは意欲、興味であるとし、J=ダルクローズも、子どもは楽しみの種を想像の中で自ら紡ぎだすので、その知識欲を刺激しながら子どもを養育するのが適切であると同様のことを述べていた。

また、J=ダルクローズは調の学習において、ただ暗記するのではなく正しい知識を使いこなすこと、学ぶだけではなくものの考え方を自分の中に滲み込ませることが重要であるというモンテーニュの教育観を用いて説明していた。

さらにJ=ダルクローズは子どもには良い音楽だけを聴かせるように、またモンテーニュは、特に乳児期の乳母の養育はその後を大きく作用すると述べ、両者共に子どもの教育は早期の教育が極めて重要であり、養育者は細心の注意を払って行

うべきであると述べていた。とりわけ聴覚と筋肉感覚においてはそれが顕著に表れると、習慣の重要性についても共通する考えを示していることが明らかになった。

そしてモンテーニュは、話すことを教えるように、琴や歌を練習なしで教えてくれるとありがたいと述べ、一方J=ダルクローズも話すことを教えるのとまったく同様に、リズム感を持たない子どもに、身体を眼や筋肉感覚がコントロールできる規則的な拍子をもった運動に慣れさせることによって、音楽的リズム感覚をもたせることは可能であるとし、両者の音楽教育観は近似していることがわかった。

以上、モンテーニュの教育思想を概観したが、

彼は、子どもの教育において、心理、精神、身体、感覚、思考の連関が、とりわけ早期教育において重要であることを指摘していた。そしてJ=ダルクローズの音楽教育は、リトミックや子どもの音楽教育、人間教育の構築過程において、モンテーニュの教育思想といくつかの共通する考えを示していることがわかった。それ故、J=ダルクローズは、自分の理想とする思い描く教育の一つの根拠をモンテーニュの教育論の中にも求めていったと考えることができる。

J=ダルクローズのリトミックが生まれた背景には、スイスにおいては音楽の位置付けが低いという彼の根本的な認識があった。そしてモンテーニュの教育思想はリトミックの構築過程において、支柱の一つであったのではないかと思われる。

おわりに

リトミック教育、指導法研究においては、若干実践研究に偏る傾向がある。しかしJ=ダルクローズの学んだ軌跡を辿って研究することも、リトミックの根本理念、根底に流れている教育思想を再認識、再確認でき、今後の指導において意義あることではないだろうか。

本稿では、J=ダルクローズの著書に記述の多かった哲学者の一人モンテーニュに焦点を当てたが、今後はさらに他の哲学者についても引き続き比較研究を行い、J=ダルクローズのリトミック、子どもの教育についての理解を深めたいと考えている。

注

1　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』板野平監修　山本昌男訳　全音楽譜出版社　2007
2　É・ジャック＝ダルクローズ『リトミック・芸術と教育』板野平訳　全音楽譜出版社　1986
3　É・ジャック＝ダルクローズ『音楽と人間』河口道朗訳　開成出版　2011
4　「スイス連邦」外務省、2016.3.7（2016.12.11）http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/switzerland/data.html#section1
5　踊共二『図説　スイスの歴史』河出書房新社　2011　p.62
6　梅根悟監修『イタリア・スイス教育史』講談社　1977　p.355
7　同上、p.378
8　同上、p.379
9　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』板野平監修　山本昌男訳　全音楽譜出版社　2007　p.114
10　同上、p.9
11　梅根悟監修　『イタリア・スイス教育史』前掲書　p.381
12　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.9
13　同上、p.18
14　同上、p.23
15　同上、p.19
16　同上、p.16
17　同上、p.15
18　同上、p.17
19　同上、p.17

20　同上、p.16
21　同上、p.16
22　*Lehrplan der Volksschule des Kantons Zurich 1905* より抜粋掲出　遠藤盛男訳
23　*Lexikon der Padagogik*, Bd.2, S.479　遠藤盛男訳
24　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.22
25　同上、p.114
26　同上、p.114
27　下中邦彦編集『哲学事典』平凡社　1971　p.1403
28　廣松渉他『岩波哲学・思想事典』岩波書店　1998　p.1603
　　下中邦彦編集『哲学事典』平凡社　1984　p.1403
29　モンテーニュ『エセー一』原二郎訳　岩波書店 1997　p.9
30　関根秀雄『世界思想編Ⅱ　子供の教育について』創藝社　1950　p.9
31　モンテーニュ『エセー一』前掲書　p.282
32　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.32
33　モンテーニュ『エセー一』前掲書　p.334
34　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.73
35　モンテーニュ『エセー一』前掲書　p.289
36　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.41
37　同上、p.42
38　モンテーニュ『エセー一』前掲書　p.334
39　ヴァージニア・ホッジ・ミード『ダルクローズ・アプローチによる 子どものための音楽授業』神原雅之・板野和彦他訳　ふくろう出版　2006　p.4
40　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.73
41　同上、p.79
42　同上、p.33
43　同上、p.34
44　同上、p.79
45　同上、p.36
46　モンテーニュ『エセー一』前掲書　pp.287-288
47　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.60
48　同上、p.60
49　モンテーニュ『エセー一』前掲書　p.207
50　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書 p.60
51　É・ジャック＝ダルクローズ『音楽と人間』河口道朗訳　開成出版　2011　p.4
52　同上、p.4
53　同上、p.77
54　同上、p.78
55　モンテーニュ『エセー四』原二郎訳　岩波書店 1997　p.78
56　モンテーニュ『エセー一』前掲書　p.289
57　É・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』前掲書　p.38
58　フランク・マルタン他『É・ジャック＝ダルクローズ』板野平訳 1977 全音楽譜出版社　p.8
59　同上、p.66

古谷和子　（埼玉東萌短期大学非常勤講師）